
仮面ライダー剣 MISSING “IS”

断空我

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー剣 MISSING “IS”

【Nコード】

N1497BA

【作者名】

断空我

【あらすじ】

54体のアンデッド全てを封印して数年後の月日が流れ、人類基盤史研究所BOARDに所属している織斑一夏は手違いで女性しか起動することのできないISを起動させてしまう。幼馴染達に囲まれながら彼の波乱万丈な生活が始まる。

11の世界について。(前書き)

すぐに更新しようかな？

この世界について。

昔、雨が降っていた。

二人の男が互いに向かい合っている。

双方ともボロボロの姿をしているがゆるぎない信念めいたものを瞳に灯していた。

男が口を開き、戦いが始まった。

同時刻、ある学者の団体が遺跡をダイナマイトで破壊して内部に侵入する。

これが物語の始まり。

“IS”この言葉と存在が世界に染みこんでどのくらいの年月が流れただろうか？

社長室のデスクで資料の整理をしていた橘朔也は考え込んでいた。

“IS”正式名称をインフィニットストラトス。元々は宇宙空間での活動を行なうためのマルチフォームスーツとして設計されたものらしいが、現在は最強の兵器、スポーツなどのパワード・スーツとしてISは使用されている。

今までの軍事兵器などを根本から覆したISだが、大きな欠点といえるものが存在していた。

ISは女性しか使用することが出来ない。

そのため、男性の地位は昔よりも下位に、女性が優位にある。

実際の所、彼が仕事の都合で他の企業の重役と会議をしている時に女性で舐められると思われる部分がある。

まあ、こっちがジョーカーという名の切り札を握っているからへこへこする必要がなかったが。

その中で、もう一つ、橘の頭を悩ませる出来事が発生したのである。

「……極めつけがこれか」

彼の目の前には書類が一枚置かれている。

『織斑一夏のIS学園入学について』と書かれていた。

織斑一夏、今年から高校生となる彼だが、どういう訳か藍越学園を受けるはずがIS学園の試験会場に迷い込み、そこでISを起動させるというとんでもない事態を引き起こしてしまったのである。

それから、彼の日常はめまぐるしく変化しつつあった。

どこその見知らぬ企業が彼を手に入れようとBOARDから引き抜きを行なってきたが、一夏自身が「自分はBOARD所属です」といい首を縦に振らないため、いくつかの企業がBOARDを潰そうとしてきたがすべて無駄に終わっている。

国からも倉持技研という所に所属しないか？という話もきたが首を縦に振らない。

そのためか、国の査察官？と名乗った男達がBOARDに押しかけて中の事情を探り不正の証拠を見つけようとしたが、そんなものは当然ないため、見つかることはなかった。

とりあえず、問題はないという事で国も手を出せない状況だがとりあえずIS学園に入学してくれと泣きついて、説得してくれという話まで言われてしまった。

そのことに関しては本人の意思を尊重するとしかった。

コンコン

考え事していると部屋のドアが叩かれて五反田弾と織斑一夏がやってくる。

「失礼します。橘さん。今回の敵を封印しました」

そういつて弾が回収したスコープバットを机の上に置く。

一瞬、カードの中のバットが動いたが封印されているから特に心配は要らない。

「そうか・・・よし、弾」

「はい？」

というのが世間の常識で、一夏達にとって白井虎太郎という人物は頼りになるサポーター！。

「やあ、二人とも。元気そうだね」

「はい！虎太郎さんも元気そうで！」

「うん、まあね」

他愛のない会話をしていたが橘朔也がコホンと咳き込んでから立ち上がる。

「さあ、弾、訓練に行くぞ」

「え……あ……俺もつと白井さんと」

「行くぞ」

弾の襟首を掴んで橘は外へ出て行く。

入学した一夏。(前書き)

ヒロインその一が登場しますね。

やってしまった感があるがとまるつもりはなっし！

入学した一夏。

IS学園。

日本にあるIS操縦者を育成するために造られた学園。

その学園には様々な国籍の女の子が技術、知識といったISを操縦するのに必要なものを学ぶ。

当然のことながらIS学園は教員も生徒もほとんどが女性で構成されている。

しかし、今年は少し様子が違った。

一年生のある教室の中で一人男子生徒が混じっていた。

その男子生徒こそ、世界で唯一ISを動かせるという事が発覚した織斑一夏である。

「(うつわぁ……想像していたよりもかなりキツイなぁ……これ)」

そんなことを考えていると副担任の山田真耶が自分を呼んでいることに気づかなかった。

「織斑一夏くん……?」

「あ、はい!」

「あ、ご、ごめんね……席順が行からで……次が織斑君なんだよね……悪いんだけど自己紹介をしてもらいたいんだ。いいかな?」

「あ、はい・・・いいですよ」

「ほ、本当ですよね？う、嘘じゃないですよね！？」

「はい・・・えつと・・・織斑一夏といいみあす。趣味はこれと違ってあまりありません。偶然、ISを動かせるという事実が発覚しましてIS学園に入学する事になりました。よろしくお願いします。以上です」

そういつて一夏は席に座る。

他の生徒達はもっと話して、という視線を向けるが気にしないようにした。

「山田君。すまない、遅くなった」

一夏が席に座ると同時にドアが開いて一人の女性が入ってくる。

黒いスーツをびしつと着こなした体に纏っている雰囲気は武人に近い。そして、一夏はその人物をよく知っていた。

なぜなら入ってきたこのクラスの担任、織斑千冬は織斑一夏の姉なのだから。

『キャー！千冬様あ！』

『一目見たときから大好きです！』

『反抗しないように躡してください』

「全く、このクラスには変人しか集まらないのか？」

「（大変、御尤もです）」

千冬の発言に一夏は心の中で同じことを思う。
彼女はんぶん！と喋ってから一言。

「諸君、私が織斑千冬だ。この一年でISの基礎を叩き込んでもらう。嫌でもついてきてもらうぞ。反抗的な態度だろうと私の言葉には返事をしろ。いいな！」

『はい！！』

クラスメイト全員ほとんどの叫びに織斑千冬は満足したようだ。

「それで、何故、お前から先の自己紹介が進んでいないんだ？」

「・・・わかりません。自分はしっかりと挨拶を終えたので」

「話しているときは相手の顔を見ろといったはずだが？」

一夏は危機感を察知してカバンの中に仕込んでいた鉄板で受け止める。

パチンと乾いた音が響いて鉄板が凹む。

鉄板の上には千冬先生の拳がめり込んでいた。

うわぁ・・・と一夏は呟く。

冗談ではない。こんなもの頭に受けてしまつては脳細胞がいくつあったとしても一瞬で0になってしまう。

そもそもこの人は人間なのだろうか？

「織斑先生・・・あなたは私を殺すつもりですか？」

「教育的指導だ。織斑」

バチバチと二人の間で火花が散る。
二人の険悪の雰囲気にも周りの生徒達は冷や汗をダラダラと長して
いた。

「失礼します・・・SHR終わりましたか・・・って、あれ？」

その時、運がいいのか、タイミングが悪いのかわからないが一人の
男性が入ってくる。

名を白井虎太郎。IS学園の特別講師としてやってきた人物だ。

「・・・白井虎太郎・・・特別講師が一体、なんのようだ？」

刃のようにギロリと睨まれた虎太郎だが特に気にした様子もなく席
に座っている一夏の手を引く。

「彼には次の授業で手伝ってもらいたいことがあります、お借り
しますね」

虎太郎は呆然としている者達を放って置いて一夏を連れて教室へと
飛び出す。

山田先生は修羅のようになっていた千冬を残されてどうなったのか、
想像できたものはいるだろうか？

「助かりました。虎太郎さん」

「いいよいいよ。資料運びしてもらいたかったのは事実だから」

虎太郎の横でダンボールを運んでいる一夏は助かったと思った。

織斑千冬とは“あの日”を境に仲が悪化した。

どうしても避けられない道、そこで一夏と千冬の道は繋がっているように見えて別れてしまった。

“あの日”を境に一夏は家に帰ることなくBOARDの社員寮で生活しており、家へは一度も戻っていない。

「その様子だとまだ喧嘩したままみたいだね」

「はい……………」

「まあ、向こうはキミを思ってたからね。曲げるつもりもないんだと思うよ」

「それはこっちも一緒ですよ……………にしても、この箱の中に入っている本。何に使うんですか？」

「授業で使う参考書だよ。いやあ、IS学園の特別講師の待遇って素晴らしいね。この本を注文したって、頼んだらあっさりと許可してくれるんだもん。国が作った学校っていいねえ」

「……………もしかして」

箱を開けて中を覗き込むとびっしりと同じ名前の本が入っていた。

手伝いを終えて戻ると丁度一時間目開始の時間らしくお叱りを受けずに済み。一夏は授業を受ける。

ほとんどの授業がISに関する専門知識で、事前に貰った電話帳のような厚さの本を読んでみたけれど、訳がわからない。

その事を伝えると山田先生が特別授業をしますと張り切ってくれて、少し助かったと内心思った事は内緒。そして、休み時間。

「（暇だなあ）」

周りを見渡そうとすると全員がこっちを見ていたらしく慌てて視線をそらす。

こういう時は何も考えず読書でもしていたほうがいいな、と判断してもってきていた本を

読み始める。

表題は『仮面ライダー』という名の仮面』

本を読んでいると遠くから生徒の話し声が聞こえてくる。

『ねえ、あの本って・・・』

『少し前にベストセラーになった本よね？』

『でも、あの本。他の授業で配っていたらしいわよ？』

『ねえねえ〜』

本を読んでいると一人の女の子が話しかけてくる。

どこかのほほんとした雰囲気で見ている制服は袖のサイズが大きいのかダブダブで手が見えない。

「えつと・・・」

「あ、私の名前は布仏本音だよ」

「布仏さんか、初めまして。織斑一夏だ」

「知ってるよ。テレビとかに出ていたよね？」

「テレビとかはともかく、面と向かって話すのは初めてだからしっかりと挨拶はしないと」

「成る程〜」

「それで・・・何か用？」

「あ、うん。ねえ、その本って、仮面ライダーという名の仮面だよね？」

「あ、知ってるの？」

「うん、私の友達が読んでいたんだ。面白いの？」

「ああ、色々と考えさせられるよ」

実際の所。この本に登場する仮面ライダーに一夏は面と向かってあっているのだが、その時からずっと、彼らの強さにいくつか不思議に思っている事があって、もう一度会えるならその答えを得たいと望んでいる。

しかし、その事実を知らない人にこんな話をしても信じてもらえないとは思えない。なにより、この本の内容自体ファンタジーモノと見られていた。

それから布仏さんとこの本について色々話しこんで。今度、その友達と話をして〜という約束をして次の授業を受けることとなる。

篠ノ之箒は顔をしかめて織斑一夏を見ていた。

今すぐにでも幼馴染である織斑一夏と話をしたいと望んでいたのだが、ずっとそれが出来ないでいる。

授業開始前に話をしようとしたのだが周りの雰囲気で行く勇気が出なかった。

休み時間、話しかけようとしたらのほほーんとした雰囲気の子があらうことか自分より先に違う子が話しかけた。その子と一夏が楽しそうに見ているのを見て箒は嫉妬する。

「（どうして私に会いにこないんだ・・・それに、どうしてあんな親しげに話すのだ）」

他の休み時間、一夏に話しかけようとする箒なのだが、あの子が引き金となって他の女子が話しかけようと雪崩のように込み入ってしまった。会いに行く事すらできない。

さっきまで嫉妬していた箒だが、次第に焦りだす。

「（ま、まさか・・・一夏は私だと気づいてないんじゃないか？）」

そんなことはまずありえないと否定した箒だが、目の前に居るのに会えないという事実により段々と気にするようになっていく。

昔と比べてお互い色々と成長しているが大好きな幼馴染の事を一日たりと忘れるはなかった。

ISを動かせる男性としてニュースとなった時も一目見ただけで一夏だとわかった。わかったのに、あっちは自分のことなど忘れてしまったのだろうか？

放課後まで箒は忘れられてしまったのではないか？という負の連鎖に包まれていた。

「ということですが、わからないところはありますか？織斑君」

「いえ、むしろとてもわかりやすいですよ！山田先生！」

「そうですかあ、よかったです」

えっへんと嬉しそうに胸を張る山田先生に笑顔を向けながら一夏は時間を見る。

そろそろ学園を出ないと寮に戻る時間が遅くなってしまふ。

駐車場に止めてあるブルースペイダーのところに戻らないと、思い一夏が立ち上がるうとしたところで。

「ここにいたか織斑」

「織斑先生、何か用ですか？そろそろ帰らないといけないんですけど」

「その事だが、学園側の都合でお前は今日から学園の寮で生活する事となった」

「……生活用品、何も持ってきていないのですが？」

「それなら僕が持ってきたよ」

「虎太郎さん」

千冬の後ろから現れた虎太郎に驚き、虎太郎の手の中にあるポストンバッグは自分の部屋においてある物だということに気づいた。

「どうして虎太郎さんが？」

「橘さんから連絡が来てさ。取りに来てくれって頼まれてさ。はいこれ」

「ありがとうございます。それでは山田先生、織斑先生、失礼します」

部屋の鍵をもらって一夏は寮へと歩いていく。

「あ、待ってよ」

虎太郎は後を追う。

ISの寮の中を歩いていたら一夏は目的の部屋を見つけ中へと入っていく。

「ここか……」

一夏が部屋の中に入るとそれなりに広。生活用品も揃っていて生活にはあまり困らないだろう。

だが、

だが、これはどうということだろうか？

「どうしてシングルベッドが二つもあるんだ？一人用の部屋じゃないのか？まさか、相方がいるのか……」

嫌な予感がして部屋を出て行こうとした一夏だが、ドアが開いて一人の少女が部屋にやってきた。

「む、同室の者か？こんな格好ですまな……」

「よ、よお……」

現れたのはバスタオル一枚でポニーテールにしていた髪を下ろしていた篠ノ之箒。

シャワーを浴びた後だからか体から湯気がでていて色気がにじみ出ている気がする。

いや、にじみ出ているのだが一夏が気づいていないだけだ。

箒は呆然としていたがすぐに剣道着などが入っている袋から伸びている竹刀を掴んで一夏に切りかかろうとする。

「させるかあ！」

その動きを予測していた一夏は箒の足を払いのけた。

しかし、場所が悪く、ベッドの上に倒れるどころかこのままでは堅い床に倒れ込んでしまう事に気づき、箒を抱きかかえるように変わりに床に倒れ込む。

ドシンと大きな音を立てて二人は床に倒れる。

もふ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いつてえ・・・・・・・・箒、だいじょ・・・・・・・・つぶ・・・・・・・・か？」

一夏は自分のしている事に目を見開く。

倒れそうになった箒を抱きかかえている。さらに彼女の丰满な胸をもう片方の手がつかんでいるという展開。

男なら喜ぶか、とんでもないことをしてしまったと反省する場面だろう。

だが、一夏はこの二つとは異なる事を考えていた。

「よ、よかった。その様子だどこも怪我していないみたいだ」

どこまでも自分より他者の事を心配する。織斑一夏ははそういう男を目指していて、そういう風になることを頑張っている一夏。

しかし、状況が最悪であるという事は変わりない。

一夏は箒をベッドに座らせてから脱兎の如く部屋から逃げようとした。
のだが、

「う……うえええー……」

子どものような泣き声にぴたりと立ち止まる。

この部屋には二人の人間しかない。

なのに、鳴き声が聞こえるのはどうしてか？

答えは簡単。後ろにいる篠ノ之箒が泣いているのだ。

どうして泣いているのか？

それは一夏が自分のことが覚えているのか不安というのが原因でもある。

一夏と話す事を何度もチャレンジしていたが、その度に他の生徒達が話しかける。放課後になってようやく話せると思ったらまさかの山田先生との個人勉強タイムに突入してしまい、話す事が結局できず。ふと思っていたあの考えがむくりと頭を上げたのである。

一夏に忘れられていたのではないかという考え。
しかし、それは杞憂に過ぎなかった。

一夏はちゃんと覚えていてくれた。成長していても自分だとわかってくれた。裸を見られたから暴力を振るおうとしたがあっさり一夏に封じられてあるうことか胸をつかまれてしまい、箒の保っていた威厳とかそういうものがすべて粉々に打ち砕けてしまい。本心と
いうか思っている事がすべて表に出てしまっちゃったのである。

「一夏のバカあ……色々と不安……だったんだぞお……
なのに、お前は……お前は他の子とばかり話をしてえ……
私の事を忘れたのかと……思っ」

「……すまない」

幼馴染にどれほど不安にさせてしまったのか、一夏は驚いて固まってしまう。

そんな一夏の背中に箒は泣きながらしがみつく。

「あ、あの日から……お前に会うのが怖くなって……再会しても私の事をわかってくれるかわからなくて……」

「幼馴染の箒のことを忘れるなんて事あるわけがないだろ！」

「ほ、本当か!？」

「と、当然だ！俺は箒の事を忘れた事なんてないさ！大切な幼馴染のことなんて！」

「そうか……嬉しいぞ。一夏……」

そこでふと、一夏は気づく。

箒はバスタオル一枚の状態で自分に密着しており、こんな状態のまま居たら箒は風邪を引いてしまうかもしれない。

「あー……。箒」

「ぐすつ……なんだ？」

「そろそろ着替えた方がいいんじゃないか？風邪引いたらいけないし」

「っ!?!?」

箒は顔を真っ赤にして服を掴んでシャワールームへと逃げ込んだ。

「……………柔らかかった」

思春期の男の子である一夏は誰にも気づかれないように呟く。

本と決闘

薄暗い闇の中で五反田弾は周囲を警戒していた。

先刻、小型のアンデッドサーチャーにアンデッドの反応を察知してやってきたのである。

周囲には人影がなく、ただ電柱のランプが周囲を照らしているだけであり、ほとんどを闇が支配している。

その中で弾は鍛えられた視力で暗闇の中から迫り来るものに気づく。

懐からギャレンバックルを取り出して中心部のラウズリーダーにダイヤのAカードを装填する。バックルからカード状のベルト・シャッフルラップが自動的に伸張りバックルが装着される。

「・・・変身！」

『Turn・Up』

叫ぶと同時にターンアップハンドルを引くことでリーダーが回転してギャレンアーマーを分解した光の

ゲート・オリハルコンエレメントを装着者の前面に放出する。

弾は駆けてオリハルコンエレメントを通過した。

通過すると同時に弾の体をギャレンアーマーが包み込む。

ギャレンとなると同時に暗闇からローカストアンデッドが襲い掛かってくる。

「うおっ!？」

突然、飛び掛られたためにギャレンの反応が遅れそうになるが、反射神経による行動によるラウザーホルスターから醒銃ギャレンラウザーを抜いて銃口をローカストアンデッドへ向けてトリガーを押す。

弾丸が放たれてローカストアンデッドは後ろに仰け反る。

さらに追い討ちをかけるようにギャレンラウザーで攻撃をしていく。

全身に弾丸を受けて仰け反って倒れたローカストアンデッドに止めを刺すためにギャレンはラウザーのオープントレイを展開して中にあるラウズカードを抜いてスラッシュリーダーで読み取らせようとしたとき。

「っ!？」

ギャレンの全身が凍りつく。

仮面ライダーとしてまだ日が浅い方のギャレンだが、戦闘をそれなりに経験しているからだいたい殺気などにはもう慣れたつもりだった。

だが、これは違う。

これは今までと比較にならないほどの殺気。

殺気を浴びているだけで全身がダメージを受けているかのような感覚に襲われる。

その際にローカストアンデッドは全身を小さなバツタのような姿に変えて行方をくらます。

「しまっ……」

アンデッドが消えると同時にギャレンを包み込んでいた殺気も消えている。

「……消えた？」

周囲を警戒するが殺気の主は見つからない。

「今の……一体」

変身を解除して弾は疑問を口に出す。
それに答える者はいない。

「ちょっとよろしくって？」

「ん？」

休み時間、本を読んでいた一夏に話しかけに来た子を見上げる。
金髪にすらりとした美がつく少女。英国人あたりだろうか？
そんなことを思っていると一夏の反応にお気に召さないのかまあ、
といい。

「イギリスの代表候補生であるこの私、セシリア・オルコットが話しているというのになんという態度ですか？」

「ああ、すまん。俺はキミを知らないからそういわれてもこういう態度しかとれないんだけど」

「まあ、いいですね。入試でただ一人教官を倒した私ですからそういう態度も余り気にしませんわよ」

「教官を倒したって……あのIS装着して戦うあれか？」

「それ以外ありませんわ」

「それなら俺も倒したぞ、といつても勝手に突撃して勝手に壁に激突しただけなんだが」

「え、ええ！？あ、あなたも教官を倒したというのですか！？私だけだと聞いていたのに」

「もしかして、女子だけの話じゃないかな？そういうことならありえるけど」

「虎太郎さん……いつの間に……」

「次の授業の担当、僕なんだよ。一夏君」

「くっ、また後で来ますわ！ですから逃げないでください！」

「……………」

「え……あの子なに？」

「わかりません」

悪役のようなセリフを残して去っていったセシリアに一夏は何もいえなかった。

虎太郎の授業というのは主に彼が執筆した二冊の本について個人がそれぞれ思った感想を述べてもらうというものだった。そのため、最初の時間は本を読む時間ということになったのだが。

「この本を読むことがISと関係あるのですか!？」

ガタツと椅子から立ち上がってセシリア・オルコットが虎太郎に尋ねる。

突然の事に戸惑いながらも虎太郎は笑みを絶やさない。

「ISとは関係ないかもね。それに僕は特別講師だからIS関係以外を教えてもらっていいという許可を得ているんだ」

「ですが、この本を読む理由がわかりませんわ」

そういつてセシリアは“仮面ライダー”という名の仮面”に対してかたる。

「この本が日本で人気があるという事は聞いています。ですが、少し目を通してみましたがこの本のどこがいいのかわかりませんわ。実在するかどうかわからない存在のことを書かれても何も感じません。なにより、他者のために自分を犠牲にするというこんな男がこの世にいるはずがありません！」

ISが世界に浸透してからというもの、男子の地位はこれでもかというくらいに下がっていて、セシリアのいう他者のために自分を犠牲にするという男というのがどれくらいいるのかわからない。しかし、それを目の前で見て、知っている一夏としては我慢できない言葉。

「訂正しろ！」

気がついたら叫んでいた。

突然の事にクラスメイトの女子、篝も驚いている。

虎太郎はやばっと思つて一夏を宥めて席に座らせようとした。

「織斑君、席に」

「て、訂正しろとはなんですか！」

「訂正しろっていったんだ。この本に書かれている男の事を何にも知らない癖に、空想だと決め付けて！拳句の果てに存在しないだど！？ふざけるな！英国にそういう男がいないからってひがんでんじやねえ！」

「あ、あなた・・・私の国を侮辱しましたわね！」

「お前も人の国の本侮辱しているじゃないか！」

「織斑君！」

虎太郎に怒鳴られて一夏は渋々席に座る。

一夏は許せなかった。

この本が侮辱されるのを。

短くも長い戦いを戦い抜いた“あの人”のやってきたことを否定されたみたいで腹が立つ。

虎太郎はひとまずセシリアにも座るように促す。

しかし、彼女の次の言葉で辺りが静まり返った。

「け、決闘ですわ！」

「・・・・・・・・・・は？」

一夏へビシツと指差してセシリアは宣言する。

「決闘ですわ。貴方みたいな男の人に侮辱されて黙っているわけにはいきませんわ！負けたら奴隷になってもらいますわ！」

「いいぜ。奴隷だってなんだってやってやる！・・・・俺が勝つたらさっきの言葉訂正して虎太郎さんに謝ってもらうからな！」

教師である虎太郎を差し置いて話をヒートアップさせていく二人。これが他の先生なら・・・少なくとも山田先生はあたふたするだろう。織斑先生は殴って鎮圧するのが目に見えている。

「ふん」

「いっっておくが手加減なんてすんなよ」

「・・・は？」

一夏の言葉にセシリアの目が点になる。彼の言葉に周りの生徒達がどつと騒がしくなった。

「織斑君」。相手は代表候補生だよ？」

「絶対勝てないって」

「手加減してもらった方がいいよ」

男は絶対に女に勝てないという風潮が世界に染みこんで何年も流れているからか、一夏の全力で相手をしろという言葉にクラスメイト達は無理だと決め付けている。

その中で一人、否定の言葉を述べた。

「男が勝てないって、そういうのはやってみないとわからないよ」

白井虎太郎の言葉にクラス全員が静まり返る。

今までどこかニコニコ、言い換えれば頼りないという言葉が似合いそうな男なのに、目の前に居る虎太郎はどこか別人のように感じら

れた。

「そういえば、織斑先生からクラス代表のことで話し合うようになっているから決闘の内容はクラス代表を賭けてということにしよう。表向きはだけど。それならアリーナも使えるからね」

「わかりました。戦うのが楽しみですわ」

「そうだな」

織斑一夏とセシリア・オルコットの間にバチバチと火花を散らせた。

本と決闘（後書き）

弾君はギャレンでした。色と性格とかで合いそうだなあと判断しました。

次回・・・白式と・・・

決闘と異変。(前書き)

決闘と異変。

「勝てるのか？一夏」

放課後となり一夏は篠ノ之箒と一緒に寮に向かって帰宅している道中だった。

箒は一夏が勝てるのかどうかわからない。

「ISに関しては基礎知識を少しずつ身につけている所・・・剣術に関してはどうだろうなあ・・・」(この所アソビや弾としか相手していないから腕がどの程度落ちているとか全くわからないんだよなあ)「

「そ、それなら私が相手をしてやるうか？」

「本当か!？」

箒の提案は願ったり叶ったりだったので、一夏は喜んだ。だが、箒の心境は超、複雑だった。

「(い、一夏のヤツ。昨日あんなことがあったというのにやけに平然としていないか!?)」

部屋のことを思い出して顔が赤くなるが一夏はこっちを見ていない。何で赤くならない!?!と少しイラッときていたが余計な事は言わずただ思っておくだけにする。

「(しかし、オーケーしたはいいが・・・大丈夫だろうか?)」

箒は懸念していることがある。

一夏の腕前がどの程度あるのかということだ。再会するまでにそれなりの月日がある。

剣の腕というのは一日だらけると取り戻すのに五日かかるといわれるので剣を握っていない時間が長ければ長いほど衰えは大きくなってしまう。

「（もし、一夏の剣が衰えていたら？）」

箒は不安を抱えながら学園内にある剣道場へ向かう。

そして、箒の懸念は無駄に終わった。

「ど………どういうことだ!？」

「な、なにが？」

箒の声に一夏は面を外して尋ねる。

額には汗が一滴も流れていない。

それなのにいい汗流したくなんて平然といるのだからこちらとしてはたまったものじゃない。

『織斑君って……意外と強い?』

『すごかった……何が起こったのか全然わかんない』

『ぜひとも剣道部に入ってほしいわあ』

「い、一体。今までどのような生活をしていたらそんなに強くなる

んだ？」

一夏の強さは彼女が思っていた以上に凄まじいものだった。剣の腕は昔と比べたら天と地の差といえるほどに上達していて箒などでは歯が立たないほどに。

「……どうしても追いつきたい、隣に並んで戦いたい人のために必死に、がむしゃらに鍛えたから……かな」

遠い目をして語る一夏の背後に並々ならぬ覚悟と出来事があったというのを箒は感じた。

「そうか……なら、後はISの動きくらいだな……というか、私を鍛えてほしいくらいだ」

「何でだよ？箒も十分強いぞ？」

アンデッドと戦う事を除けば……だが、

「そついや、箒はISのことには詳しいのか？」

「……そこそこにな。お前よりかは知識がある」

「なら助かる」

「どつしてどつ……あいつはアイツ以上に厄介ことを運んで

くるんだ」

BOARDの社長室で珍しく橘朔也は頭を悩ませていた。

彼の据わっている机の上には日本政府から送られてきた資料が置かれていて“織斑一夏の使用するIS”について、と書かれている。

「全く・・・どうしてこう次から次へとややこしい展開に」

「失礼しまーす・・・・・・・・・・」

その時、虎太郎が部屋に入ってきて場が静まり返る。

「失礼しました」

「待て！」

去ろうとした虎太郎の肩をガシリと橘は掴む。

「あ、あの橘さん・・・・・・・・？」

「これはどういうことだ？」

「ないなに？」

虎太郎は資料に目を通す。
少しして。

「ISって、BOARDにないんだっけ？」

「一機だけある。倉持技研から欠陥品として押し付けられたものだ

「がな」

「そのの武装つてなに？」

「剣が一本だけだ」

「ならいけるんじゃない？」

「それが問題なんだ」

橘はBOARDに保管されてあるISの情報を虎太郎に見せる。

「……この内部事情が知られたら少しヤバイかもね」

「アンデッドを探す事がより困難になる」

「そういえば……あれは見つかったの？」

「未だに行方不明……誰がなんのために奪ったのかもわからない」

「このことを知ったら剣崎君戻ってきちゃうよね？」

「確実に……だから睦月に探してもらっている。アンデッド封印は実質ギャレン一人で行なってもらっていることになる」

「まだ上級が一体も見つかっていない状況で戦えるライダーが一人だけってかなり不利だよね……」

「だが、頑張ってもらおうしかない」

セシリア・オルコットとの決闘の日。
どういうわけか一夏の専用ISが届かない。
そのために開始時間が遅れている。

「遅いな……」

「そうだな」

「これならラファールとか借りてやった方がいいと思っただけど？」

「無理だ。学園上層部の命令でデータを取るためにBOARDとやらが用意する専用機で戦ってもらおう」

「……」

傍に居る織斑千冬という言葉に一夏は何も言わず目の前の映像を見ていた。

するとドアが開いて虎太郎と山田先生がやってくる。

「一夏君！遅れてごめん！持って来たよ」

「虎太郎さん！山田先生！」

一夏が叫ぶと同時に部屋の中央にISが現れる。
全身が白に包まれた機体。

全てが白の機体。

「これが織斑君のIS、白式です！」

「びやく・・・しき？」

一夏は呆然としながら白式に乗り込む。

「織斑、フォーマットとフィッティングは戦いの最中で済ませろ」

「時間がないんですね・・・了解しました。箒、虎太郎さん」

「な、なんだ？」

「なにかな？」

「行ってきます」

一夏はそういつてアリーナへと向かう。

「ようやく来ましたわね。謝るなら手加減して差し上げてもよろしいですわよ？」

「そんなもん必要ない。本気で来い！」

一夏の前に浮遊しているセシリア・オルコットの専用機“ブルーテイアーズ”のメイン武装『スターライトmk?』の銃口がこちらに向けられた。

白式を動かして飛んでくる光弾を避ける。

「踊りなさい。私とブルーティアーズの奏でるワルツに！」

同時に白式から警告音が出される。

ブルーティアーズのスラスタールとして接続されているビット型の武器が次々と白式を狙ってきた。

「おっと……」

一夏は持っていた大型刃で光弾を防ぐ。

「って……マジか!？」

持っていた武器が一度レーザーを受けただけで刃こぼれしている。これは意外とマズイかも……。

「織斑君、劣勢ですね」

「そうかな？」

「少し違うと思います」

「ほお、何故そう思う？」

映像で様子を見て、山田先生とは異なる返答をした虎太郎と篝へ尋ねた。

二人はそれぞれ思っている事を述べる。

「一夏の剣の腕はあんなものではありません」

「一夏君は無謀な戦いをしないからね。長引いているというよりは長引かせてなにかをしようとしているんだと思う」

虎太郎達の意見どおり事態が動く。

「（そうか・・・あのブルーティアーズとかいう武器を動かしている間、あいつ自身は動かない・・・いや、動けないみたいだな。それと他の武装との併用は出来ないみたいだ。よし、動くか）」

白式のブーストを吹かして手にあるブレードを振るう。

「甘いですわ」

ブルーティアーズは動きを予期してたため、道を遮るようにビットのレーザーが白式の進行上に降り注ぐ。

「なっ!?!」

「どうした?」

セシリアは目を見開いた直後に一夏の白式が持つブレードが振り下ろされブルーティアーズのエネルギーが減少する。

「あなた・・・私の動きを予期していたというの!?!」

ブルーティアーズのビットから放たれたレーザーの合間をすり抜けるようにして白式は動いて一ダメージも受けることなくブルーティ

アーズへ接近を果たす事ができた。

「まあ、そんなところかな？」

「これ以上はやらせませんわ！」

ブルーティアーズを動かして雨のようにレーザーを降らす。

一夏は白式のブレードで受け流そうとするがパキーンと音を立てて刃が折れて、白式の足の部分のアーマーが音を立てて亀裂が入る。

「やべっ！」

一夏は焦る。

自身の武器が破壊された事。
敵が手を抜く事を辞めた事。

まだ切り抜けられない状況ではないがこのままでは勝てないだろう。

「（こいつに勝つには初期操縦者適応が必要だ。だが、まだ時間かかるのか？）」

「もう手加減しませんわ。受けなさい！」

「こなくそお！」

一夏は飛んでくるビットの身近なものを次々と折れた刃で叩き潰していく。

ビットの動きを読んでのヒットアンドウェイを繰り返すビットのほとんども破壊した。

「中々やりますわね……でも、ブルーティアーズはまだありま

すのよ！」

腰に装備されていた二対の砲弾が白式に迫り爆発する。勝った！とセシリアが思った直後、煙を切り裂いて純白の機体が姿を見せた。

先ほどよりも白く、新しいブレードを持った白式。

まさか、とセシリアは戸惑う。

「まさか・・・あなたファーストシフトせずに戦っていたというの！？」

「時間もなかったしな。悪いがこれで終わらせて」

新しくなった武器“雪片式型”を構えて切りかかる。

IS学園警備室。

アリーナで生徒達が戦いを見ている頃、異変が起きていた。

「す、すぐに本土へ連絡しろ！増援を・・・」

叫んでいた警備員の周りを大量のバツタが取り込み、口や鼻の中へと入り込んでいく。

「ひっ・・・あ・・・っ・・・ぐっ!?!」

あえぎ声を上げながら呼吸器官を塞がれて警備員は窒息死する。

「ひっ・・・ひiiiiiiii!?!」

目の前でむごい姿で死んだ同僚を見て息を呑んで座り込んだ警備員の周囲を飛び回っていたバツタがある姿を形成していく。

バツタの姿に人型の体系。
ローカストアンデッドはゆっくりと座り込んでくる警備員へ近づいていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1497ba/>

仮面ライダー剣 MISSING “IS”

2012年1月6日23時51分発行